

精神医学は何を対象としているのか？

—精神医学の哲学と精神障害概念—

石原 孝二(東京大学)

「精神医学」という言葉が登場するのは19世紀初頭であり、ライルが1808年に *Psychiaterie* (後に *Psychiatrie*) という言葉を使用したのが最初である。ライルは「精神療法」というような意味で *Psychiatrie* という言葉を使っていたが、1837年に出版されたロイポルトの教科書では、精神医学とは「精神的な病 (*psychische Krankheiten*) とその治療 (*Behandlung*)、もしくは精神的な病の病理と治療 (*Therapie*) に関する学説」であるとされている。これは現在における「精神医学」の理解に近いものだろう。

精神医学において「精神的な病」とは一体何なのか、身体的な病との関係はどうなっているのかが常に問題となってきた。ライルは身体的な病からはっきりと区別された純粋な「精神的な病」があるとは認めていなかったが、ピネル、ハインロート、グリーゼンガー、クレペリン、ヤスパース、シュナイダーなど、精神医学の歴史的な展開に重要な役割を果たしてきた研究者たちは身体的な病と精神的な病の関係に関して、様々な見方を示してきた。

現代の精神医学においては、精神医学の対象を「精神的な病」(*mental disease/psychische Krankheit*) ではなく、「精神障害」(*mental disorder/psychische Störung*) とすることによってこの問題をさしあたり回避することが可能になっているように思われる。ICD第6版(1948)およびDSM初版(1952)以降、WHOとアメリカ精神医学会は「精神障害」というタームを採用し続けてきた。「障害」(*disorder*) というタームには「病」(*disease*) とは異なり、生物学的な病因があることを前提にしないという利点がある。1980年のDSM-IIIでは、*disorder* のこうした含意が明確化され、記述的アプローチが導入されることになる。記述的アプローチを採用することによって、「病因」が判明していない精神障害を症状等にもとづいて分類することができるし、理論的なアプローチ(例えば、

精神分析的なアプローチや生物学的アプローチなどが異なっても同意可能な分類を行うことができるのである。

精神障害概念に関して DSM-III で明確化されたもう一つの重要な基準は、障害は個人の行動的・心理的・生物学的な「機能不全」に由来するものでなければならないということである。(ある個人が精神障害をもっていると言えるためには、どのような性質のものなのかは不明だが、とにかく何らかの機能不全がなければならない。)この基準は、精神疾患 (mental illness) 概念や精神医学に疑念を投げかけたサズやクーパーたちの「反精神医学」と呼ばれる動きや、米国の DSM における「同性愛」の取り扱いをめぐる運動を背景として、(純粋な)社会と個人との間のコンフリクトの「精神障害」化を防ぐためのものとして導入されたものと考えることができる。

しかし、「機能不全」とは一体何か、「機能不全」と「精神障害」の関係はどのようなものなのかは明確にはなっていない。したがってまた、個人が抱える問題が社会と個人との間のコンフリクトに過ぎないものであるのか、それとも個人の内的な機能不全に由来するものなのかを区別することは不可能である。DSM-III の時点では、適切な分類を行うことによって、病因や病理学的なプロセスに関する研究が進み、「機能不全」に関する理解が深まるという期待があったように思うが、DSM-5(2013)に至っても「機能不全」に関する理解は深まることなく、精神障害の根底にあるものとして想定されているだけである。それどころか、DSM-5 では、DSM-III 以来の記述的アプローチの理想の放棄が宣言されている。この放棄は、ヘンペルが 1959 年の有名な講演で提案した精神疾患の操作主義的な定義の理想の放棄と考えることもできる。

このような状況における精神医学の哲学の重要な課題の一つは、精神医学が一体何を対象にしているのかを改めて問うことだろう。上述のように、DSM における「精神障害」概念は、社会と個人との間のコンフリクトに還元され得ない「機能不全」に依拠しているが、精神障害の発生過程とその回復過程において社会的要因をより重視する精神医学の最近の動向はこのような精神障害概念理解をますます困難にしているように思われる。

精神医学が一体何を対象としているのか、また何を対象とするべきなのかを考えるための哲学的な道具として、本講演では、精神障害に関する「自然種」

をめぐる様々な議論と、「介入主義」に関する Woodward の議論を紹介し、その有効性を検討していくことにしたい。

(本研究は JSPS 科研費 24300293「精神医学の科学哲学：精神疾患概念の再検討」の助成を受けている。)

参考文献

- 石原孝二 (2015). 精神医学における記述的方法と「機能不全」モデル：精神障害概念と「自然種」.『科学哲学』47(2): 17-32.
- (2014). 「精神障害」概念の行方と DSM-5(シンポジウム 1DSM-5 を批判的に吟味する).『精神科診断学』7(1): 16-21.
- (2013).『精神障害の診断・統計マニュアル』(DSM) と医学モデル. 中山剛史・信原幸弘編『精神医学と哲学の出会い』玉川大学出版部: 208-226.